

健康・医療・介護の未来づくり： Social Joint Venture (社会的協働)

結核研究所対策支援部保健看護学科
座間 智子

第79回日本公衆衛生学会総会は、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系の今中雄一教授を学会長に、令和2年10月20日～22日、初めてのオンラインで開催されました。総会のテーマ「健康・医療・介護の未来づくり:Social Joint Venture (社会的協働)」は、健康・医療・介護の実態を可視化し課題を共有、すべてのアクターが意識的に明示的に協調して参画し、健康医療介護システム運営・社会的協働を目指すものです。政策、実践、研究の立場から企画されました。

今年は、新型コロナウイルス感染症の流行により特別講演は、「COVID-19の対策：これまでそしてこれから」と題して尾身茂先生の報告がありました。新型コロナウイルス感染症対策の現状を時系列に解説、クラスター対策を含めた今後の課題が明示されました。COVID-19に関しては、1日目に3つのシンポジウム、2日目は1つの教育講座、3日目は2つのシンポジウムで取り上げられ、ダイヤモンドプリンセス号での対応、感染症対策と地域社会における連携について、保健所、検疫、医療・研究機関から現状報告がありました。さらに、医療や介護の地域包括ケアの課題について、京都市や千葉県柏市の事例が取り上げられ持続可能な共生社会の在り方、AIを駆使したまちづくりなどの提言がありました。

また、一般演題第12分科会感染症では、結核関連演題(口演)7題が発表されました。具体的には、日本語学校での集団感染、外国出生患者対応や、東京都の行動調査票を用いた感染源探求等の研究内容でした。示説では、31演題のうち結核に関するものは7題ありました。

結核集団発生の対策に関する自由集会

学会前日(11月19日5時から16時)、結核予防会結核研究所と京都府健康福祉部共催による集団発生対策の自由集会が開催されました。オンラインミーティングに保健所等から130人の参加がありました。

京都市からは、「閉鎖病棟での結核集団感染事例」(発

表：池田雄史先生)の報告でした。精神科病棟での事例は、認知症高齢者の結核患者発生に対して、正確な情報の聞き取りを行う積極的疫学調査や、感染拡大予防のための接触者健診を含む早期介入の重要性が挙げられました。



学会ポスター

2事例目は、東京都中野区保健所の「Kネットを活用したMDR集団感染事例の広域連携」(発表：向山春子先生)の発表でした。薬剤耐性を持つ外国出生結核患者の集団感染事例は、外国出生患者のフォローアップの難しさが指摘されました。頻繁な転居等から追跡が困難で、自治体を越えた保健所間の広域連携の必要性が課題とされました。

この2事例から学ぶことは、集団発生の事例を、点から面へと複眼的にみることの重要性です。

1施設での集団発生事例を、近隣コミュニティ、近隣自治体と情報を共有し、いかに結核対策の強化につながられるかが課題として示されました。最後に、京都府健康福祉部保健医療対策監の糸井利幸先生よりまともにご挨拶をいただきました。

世界中が体験している未曾有の事態は、感染症対策だけではなく、医療・介護を含む地域包括ケアにも絶大な影響を与えています。先の見えない中、これまでの知見や斬新なアイデア、関係機関の連携が最も必要とされます。次回の第80回は、東京で開催されます。今回のテーマであった「未来をつくる社会的協働」が、今後どのように示されていくのか期待しつつ、自分がどこにかかわれるのかももう一度聞きたいと思います。

